

多様な“出口”生み出して

経団連が就職活動のルール廃止の意向を表明したり、インターンシップが急速に普及したりするなど過渡期にある大学生の就職活動。大学や地域はこの変化にどう向き合うべきか。リクルートキャリア(東京)の研究機関「就職みらい研究所」の増本主任研究員に聞いた。

―就職活動でのインターンシップの役割は。

短期決戦の中で、企業は学生から認知され、なおかつ魅力的と思われなければ応募は集まらない。準備段階(大学3年の会社説明会の解禁前)でいかに魅力を伝えるか、という意味で重要性は増している。企業は質、量ともに採用難。採用を意識しながら積極的に取り組むことがスタンダードになっている。

―大学による取り組みの意義は。
学生数が減り、大学が生き残

インタビュー

就職みらい研究所 増本 全さん
主任研究員



大学のインターンシップの可能性と課題について話す増本主任研究員
=東京都中央区、リクルートキャリア



□5□

りをかける中で「出口」(就職先)は大学選びのキーワード。進路決定に深くかわかる保護者の考えに影響するし、受験生も学校選択の際に気にしていることが調査で明らかになっている。学生は直接企業の中に入る。大学の魅力を知ることができ、企業側は付き合いがなかった大学のよさに気付く可能性もある。

―大学発インターンの課題は。

実施率は高いが応募者は減っている。学生にとってはもっと気軽に参加できるプログラムがあるし、大学の場合は、行きたい企業に行けるとは限らない。事前・事後の教育を担える専門人材や学内の連携が足りない大学もある。受け入れる企業側に目的を理解してもらうことや、受け入れの負担軽減も必要だ。

―地方の大学は都市部だけではなく地元人材を輩出する役目もある。

バランスが必要だ。大学として経営を成り立たせるためには就職する企業にバリエーションはあったほうがいい。ただ、県の特色ある産業を起点に大学が企業や地域と連携していくことも大事だ。アルミニウムの生産が盛んな富山県では、大学と企業が協力して最先端の学びができる環境をつくり、首都圏の学生のインターンシップを迎え、地域の魅力を感じさせて定着につなげようとする取り組みがある。大学だけでは難しい。

〓おわり〓